



無茶々園の柑橘栽培

柑橘栽培は長い年月をかけて木を育ててゆく営みです。30年から40年ほど栽培するのが標準的ですが、兎にも角にもまずは苗木を植えるところからはじめます。苗木を植え付けるのは芽吹きを目前にした3月。いったん芽が吹くと、続けて新しい根が動きはじめ、植えられた場所にしっかりと定着していきます。あまり植える時期が早すぎると冬の寒い風に吹かれて発芽前に弱ってしまいます、逆に遅い時期になると既に木が活発に動きはじめたなかで根を切断してしまうことになります。これから順調に育成していくために、植え付けに適したこの一ヶ月で一斉に苗木の植栽作業を進めていくのです。



レモンの苗を植える生産者・高岡勇治

柑橘栽培では苗木は「接木苗」を用います。接木苗とは、「台木」と呼ばれる若い木に、育てていきたい品種の「穂木」を接ぎ、この穂木から出た芽を大きく育てていくものです。台木から出る芽はすべて除去してしまうため台木自体の果実ができるではなく、地中の根だけを活かして育て、枝葉や果実は穂木の品種のままで育ちます。いま柑橘のほとんどの品種で台木として利用されている“キク”は一般的にはカラタチとして知られ、まさに縁の下の力持ちとして柑橘栽培を支えています。



苗は束ねられ、箱に入って届きます

この10年ほどは毎年1万本前後の苗木の導入が続いている。台風による被害や新品種が続々と生まれた背景もありますが、もともと1950年代から60年代に柑橘産地化した明浜では木の樹齢が50年を超えるような老木が多くなっています。老木になると果が不安定になるほか、木が大きくなりすぎると作業性も悪く、少しづつ枯れる木が出て畠が歯抜け状態になり、そろそろ植え替えが必要な時期になっていました。気付けばこの10年で栽培面積の約30%にあたる約40haを植え替え、いま無茶々園の園地は樹齢の若い木が多くなりました。植えてから数年間は収穫がなく一時に生産量が減ることにはなりますが、今後20年、30年先のことを考えれば前向きな植え替えになります。♪

さて、この3月にも13,000本の苗木が田主丸の苗木農家から入荷してきました。いっぺんに入っていますので、品種ごと、農家ごとに仕分けて配布しなければいけません。毎年若手の農家や事務所・てんぽ印のスタッフが大勢集まって仕分け作業を行い、今年は農業体験に来ていた高校生や大学生にも手伝ってもらいました。倉庫の中が苗木でいっぱいになる春の恒例行事になっています。こうして配布した苗木は、古い木を伐採して植え穴を掘って待ち構えていた農家の手に渡り、一週間くらいの間に新しい畠に次々と植え付けられています。

大苗育成

昨年から新たに取り組んでいるのが、苗木をすぐには畠に植えず、一年間大きなポットで集中的に育成する大苗作り。柑橘栽培での悩みの種であるゴマダラカミキリムシの被害に加え、以前は明浜では見かけなかったミカンナガタマムシの被害が増え始め、樹勢が弱くなった老木が急に枯れ込んでしまう園地も出てきました。部分的に木が枯れた園地では空白になった場所に苗木を補植するのですが、全面的に植え替えた園地に比べてどうしても手が行き届かず、苗木がなかなか育ちにくいもの。そこで、あらかじめボットで大きく育てた苗木を植えて解決しようとする試みです。



春の祭典

今年も無茶々園で、4月3日に恒例の「春の祭典」が行われました。この祭典はその年のかんきつの豊作と天の恵みを祈願し、毎年狩浜・本浦地区の段々畠の中にある“客人神社”で行われます。この客人神社にはかんきつを日本に伝えたとされる「田道間守（たじまもり）」が祀られています。

今から31年前の1991年9月、「青森で収穫前のリンゴを落とした台風」として知られる台風19号によって明浜の柑橘栽培は甚大な被害を受けました。この台風は、みかんを落としただけでなく、暴風によって吹き上げられた海水が柑橘園に降り注ぎ、塩害によって木を枯らすという被害を引き起こしました。台風が過ぎ去った後、青々としていた段々畠が茶色く変わり果てた光景に多くの農家が落胆したそうです。【3日たち、4日たつうちに、みかんの葉っぱが落ち出した。みかんの葉っぱが枯れだした。あれよあれよという間に山も竹やぶもみかん畠も茶色に一変してしまった。(1991年11月5日発行天歩第2号より抜粋。)】

苦しい時の神頼みと考えた農家はかんきつの神様を迎えるようという話になりました。



ポットに植えた苗木

無茶々園では食べやすさや甘さを重視した最新品種は慎重に導入している一方で、農薬を使わなくても作りやすい品種や古い品種を大事にしながら次の品種構成を考えています。

柑橘栽培の農事暦では、芽吹きと花が訪れる春が一年のスタート。これから数十年の伴侶になる新しい苗木とも付き合いがはじまります。植え付けてから数年間は、新芽を伸ばすことに集中させ、体を大きく育てていく育成期です。今年も期待を込めて植えた苗木の育成がはじまっています。

社を建てる

発起人の一人、片山元治は田道間守を迎えるため、和歌山県の下津町(現 海南市)にある橘本神社に出向きました。「神様を迎えたことなんてないけど、何を持っていけばいいかわからなかった。ホームセンターで買った神棚を茶葉の入っていた桐箱に入れて風呂敷に包んで持て行った」そこで御靈を分けていただき、大工に造ってもらった客人神社に合祀し、4月3日を「春の祭典」としました。また、狛犬は日本の農業経済学者であり、愛媛大学の教授であった安達恒生さんにより寄贈されました。

人々の願い

今年は桜が咲き誇る中の祭典でした。祭典の後には今年こそ例年通りの「直会」が開催され、神前に供えた神饌(しんせん)を、農家・実習生・スタッフ・参拝者と一緒に頂きました。また、交流の場としての意味合いもあり、祭典の一部とも言えます。昨今の異常気象、相次ぐ自然災害にこの小さな田舎の段々畠もさらされています。いつまでもこの地域の神も海も山も人も共にあり続けるよう、しなやかに変わり、守るべきものを守っていきたいものです。



塩害によって被害を受けたみかんの木(1991年台風19号)



木になるカカオと筆者

ベトナムの話

これは私が3月27日～4月3日にベトナムに行った話。
日本から約6時間。ベトナムのホーチミンというところに着いた。
暑い、とにかく熱い。クラクションが鳴り響き、道を埋め尽くす
バイクと人々。ただ道を横断するということさえスリリング。特
有の香辛料の匂い、どこかふてぶてしく徘徊している動物たち、
日本とは異なる国。久しぶりの外国、初めてのベトナム、いろんな
意味で熱いなと感じた初日。

普段私たちてんぽ印ではベトナム人の技能実習生のメンバー達
と仕事をしている。農作業を中心にベトナムから輸入された胡
椒やカカオの商品化という作業なんかも。彼らの印象はいつも飄々
として、よく笑っている（…笑ってごまかしている！？）。彼らか
ら見たら私は厳しい日本人だと思う。ちなみに上司につけられた
私のあだ名は「鬼軍曹」だ。

正直、ベトナム行きの提案があったとき、それ程前向きにはな
れなかった。自分たちの農作業も手一杯だし、今行く必要がある
のだろうかと…。結論は、うん行ってよかった。

研修の目的は、FUV（無茶々園の現地法人）の活動やベトナム
社会や経済情勢の視察を通して国内外における情勢の変化を実感し、これまでの価値観や認識のアップグレードを図ることや実習生たちの生活状況の視察や家庭訪問を通して“人と人”としての関係性の深化を図ること等々あるが、最終的に上司に言われたのが3つ。「内向きになるな」「とにかく楽しんで来い」「色々感じて見聞を深めてこいや」だった。



二日目からは帰国した実習生たちが多数いる、ベトナム中部高
原地帯のバンメトート市に移動。かつての実習仲間達を訪ねた。ノ

彼らの家族と出会い、話をし、ご飯を食べ、そのままガイドをお願いした。ベトナムでは日本語はもちろん英語もあまり通じない（特に地方に行くほど）。バイクの後ろにまたがり、言葉も行動も彼らを頼り、彼らに委ねる。信号がありなく、車線もあってないようなもの。ルールよりも流れに身を任せた。

さらに鬼軍曹への心からのおもてなし。見たこともないフルーツと本当に美味しい料理に、時にぎょっとする食材。胡椒の収穫体験では高いはしごを使って上へ上へ！途中、蟻の巣に遭遇し強襲受けながら収穫し、また農家のお母さんたちと一緒にご飯を食べる。普通の旅行では味わえない体験の数々。



美味しかった料理のひとつバインミー（ベトナム風サンドイッチ）

日々のゆったりとした時間と喧騒のギャップと、時に滑稽を感じる事なんかもありながら（失礼！）も、逞しく、前向きに上向いて奮闘している人々（若く活気のあるベトナム人たちや現地に住むさほど若くはない日本人たち）と接することで自分の視野の狭さや、人としての小ささ、不甲斐なさを感じ、打ちのめされた部分もある。ただ、打ちのめされた事が嬉しくもあり、気合を入れてもらった旅でもあった。もちろんたくさん笑ったし、たくさん美味しかった。同時に今後実習先として日本が選ばなくなるだろうと言われる理由も少しだけ分かった気がした…。

ベトナムでは道路を歩いて横断するときはけっして後退してはいけないという。止まるか、進むか、選択肢はそれだけだと。「止まるか、進むか=後退してはいけない」…なんかいいなって思いつつ、ちょっとだけの時差と共に帰路へ着く。そんなたった1週間の小さな旅。さ、これから甘夏収穫最盛期。がんばっていこー。

【てんぽ印 酒井朋志】



バンメトート市の朝市



カカオボッドの中に入っているカカオ豆



胡椒の木に登って収穫

農業体験記



3月17日から27日までの11日間、キリスト教独立学園高等学校の生徒さんが無茶々園での農業体験に来てくれました。

農家、斎藤達文の農園で過ごした感想文を紹介します。

写真（左：天明あかねさん 右：木下結衣子さん）

私は11日間の農業体験を通して新たな出逢いがたくさんあったなと感じています。それは景色だったり植物や海の生き物、これまで体験したことのない作業や地域で暮らす方々の生き方と、様々なものがありました。

無茶々園に来ようと思ったのは普段経験できない作業や地域の方との関わりを通してこれまで出逢ったことのないものと出逢えたらいいなと思ったからです。

在学している高校で大切にしているものの中に「労働」と「天然」があります。自然とともに生活することは決して楽なことではないけれど学ぶことが沢山あるなど気付かされ、知らない地域ではそこならではの自然と生き方があるのでないかと思いました。



とても働きもののお2人でした。

私は無茶々園でいろいろな人と出逢うことができた。明浜にある温かくておおらかな雰囲気に包みこまれているここの人達は皆自由に生きていた。

ここにいる一人一人に物語があった。それはやはり誰でもwelcomeな無茶々園だからこそなのだろうか。この場所へこれで本当に良かったと思う。ここに広がる風景はずっと憧れていたものだった。暑い陽射しと青い海、山の緑とそこに散らばるみかんの色。作業中にふとあたりを見回す度にこれは本当に現実なのだろうかと思った。それでもやはりここに11日間来たことは現実だった。

11日間、かんきつの収穫や苗植え、除草や選果のお手伝いなど、沢山の事を体験させていただきました。その中で食べ物が作られる背景を知り、「知ることは」大切だということに気づくことができました。今まで普段から食べているものがどんな風にどんな想いが込められて作られているか考えることなく食べていたようだと思い、今回一部であるけれど知れて良かったと思います。

また、働くことと生きていくことが直接、強く結びついていることを改めて実感しました。「労働」が大切にされている学校だけれど、これまで私はあまり働くことについて考えないで作業してきたように思いました。



ひょう柑の収穫

今回無茶々園で作業をして、生きていくために働くことがどんなことか考えるきっかけになりました。他にもわかめや貝などの海の幸を自分で採り、食卓でいただけた事、無茶々園に行っていなかったら出逢う事がなかった方々と色々お話をできた事、様々な人とその人の生き方について知れた事・・・今回、無茶々園での経験と出逢い、そして農業体験を受け入れてくださったことに感謝しています。【木下結衣子】

その証拠に私はここで食べた数々の美味しいもの達を記憶している。たくさんの魚、作業中に食べていた甘夏やいろいろな種類のみかん、磯でとった貝たちそして毎日いただいたご飯。特に魚は私の中にあった今までのイメージが崩されて「魚はこんなにおいしいものなのかな」と思ってしまった。

私がここに来て心に残ったのは「人がどうこうしたところでみかんの木はちょっとやそっとで変わらない」という言葉。本当に人の力は自然の力には及ばないんだなと思った。潮の満ち引き、そしてそれによって現れる磯にいる生き物達。この世界はこんなにもたくさんの命が満ちているんだと思った。

また、私はみかん畑と段々に作られた石垣を見て人が作り上げる「風景」の凄しさにも圧倒された。そこには「人」と「自然」が織りなす景色が広がっていた。そして私はそこに人よりも自然よりも大きいにかわからない力が働いているようにも感じた。

11日間実習をさせていただき本当にありがとうございました。あたたかい人達がいるこのみかん畑の広がる地で作業ができ本当に楽しかったです。【天明あかね】

キリスト教独立学園高等学校は山形県にあり、全寮制、普通科の高校で、生徒数は約70人という小規模な学校です。聖書を基盤として真理を求め、囲まれた大自然の中で生きるために労働をし、独立人となることを目指して生活しています。

（キリスト教独立学園高等学校 HPより抜粋 <https://kdg.ed.jp/>）